



「いのちを守る森」づくり＝ABMORI

山ノ内町ではESD活動の一環として、閉鎖されたスキー場跡地に、志賀高原の環境に合った植樹を行い森林再生をしています。今年も6月5日に6年生が参加し、自分たちが3年生の時に採取した稚樹などを植えました。(山ノ内町立東小学校)



教育研究所 第76期 研究員座談会… 2～4 信濃教育会賛助会員会入会案内… 5

信濃教育会の事業についての会員アンケート報告… 6～7

リレー通信 わたし自慢④ 世界は未知に満ちている 竹内 大(丸子北小学校)… 7

100年館の絵 茅野弘幸(田口小学校)… 8

会員ひろば 押澤利満(清水中学校)… 8



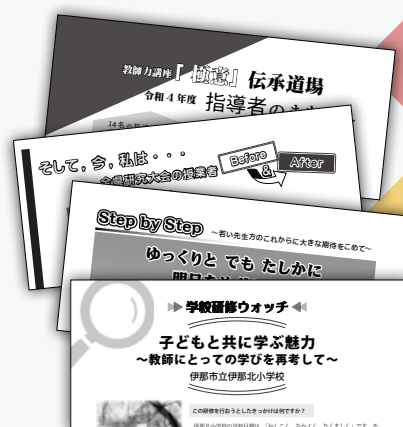
■ 信教発 教育情報誌 ■

「Booklet 信教」

から「実践のヒント」が見つかるかも？

全県研究大会、信濃教育会が行う研究調査、講座・講習などから日々の実践のヒントになる情報を掲載します。毎号1冊を各校へ配布しますので、ぜひご覧ください。

■ 発行 vol.127～vol.133 (全7冊)
■ 問い合わせ先 研究調査部 kenchou@shinkyo.or.jp



研究所での学びを語り合おう！

小川 敦嗣 小野光太郎 赤羽 雄太
福島 章浩 伊藤 葉子 黒岩 誠



共に学ぶ仲間になる 第76期研究員

研究所での 学びの時間をいただいて

黒岩：私は研究所に来なければ、触れることのなかったかもしれない長野県の教育の歴史を学んで刺激をもらいました。正直、今まで教育というものをしっかり考えたことがなかったけど、教師としてそこに居るとはどういうことか？とか。新たな世界に触れることができてよかったです。

しゃべり出したら
止まらない！
研究員の推薦図書も
ご紹介！



黒岩研究員推薦：
「木のいのち 木のころ 天」西岡常一 著

福島：そうそう、私たちは教師として知らないことが多すぎたよね。現行の学習指導要領も何か新しいことが出てきたのかと思っていたら、実は過去の先生方の積み重ねによって50年も100年も前から大事だと言われていたことが、ようやく認知されて世の中に出てきたことを知って本当に驚いたよね。

赤羽：僕は教科や学校を中心に考えがちだったんです。美術の楽しさ、面白さ、難しさを超えたところにある喜びを伝えたいと思ったけど、それは大事なことのうちのほんの一部であって。やっぱり、人間って何だろう？とか、人が成長していくって何だろう？とか、発達していくって何？とか。世の中は大きく変わっていくけど、私たちはどういうふうに変わっていけばいいんだろう？とかってことを考えなければいけないなって今は思います。学習指導要領も研究所で学んでから読んでみると、また読み方が変わりました。

小野：今まで自分は学校っていう枠の中だけで考えていたんだけど、自分の頭で、教育って何？学んで何？って考えていたというよりは、学校という社会や仕組みの中で、今までのやり方を踏襲して何となくやっていた部分が多かったんです。でも、研究所に来て教育の世界だけでなく、広い世界を見聞きしていく中で「教育の世界に身を置く者として、あなたは自分の頭で考えなきゃいけないよ」と思わされたのが一番大きいか。自分では考えてやってきたつもりだったけど、実は「動く歩道（コンベア）」にちょこっと乗っかって、その流れに身を任せていただけだったのになって。

福島：確かに私は学校にいる時には、一旦止まるという

ことができなかった。一旦止まって景色を見回すとかじゃなくて常に進み続けなければならない。じっくり考えるって至難の業だった。学校では自分で学んだことをすぐに実践として生かせるよさがあるけど、研究所は自分を振り返ってとことん学び直せて、その学びをじっくり溜め込めるっていうのがよさだね。

小川：「動く歩道」に乗っていたらずっと流されていたけど、研究所に来て一旦動く歩道を降りたら、今までの景色がどんなだったかを振り返って見ることができましたね。自分は学校しか知らなくて、自分の受けてきた教育を生徒たちにもやってきたんだけど、活動一つ一つの意味とか深く考えずにやってきて。それでもここまでなんとかやってこられた。でも、今までの延長線上でやったら、子どもたちも自分と同じように考えない人たちになってしまうような気がして…。世の中が大きく変化してきて、子どもたちの未来は私たちが経験したことの無い社会になるんだろうなと考えてみると、僕が変わらないといけないって思ったんです。子どもたちには自分で考えて歩いていける経験をたくさん積んで、学校を卒業して欲しくて。自分は考えずに、踏襲するだけで歩んでいたってことに気づけなかったから…。研究所に来てそこに疑問を感じることもできた。そういうことすら考えてこなかったから。こうやって考えると大きな転換点だった。180度考え方が変わったもの。



小川研究員推薦：
「子どもを「人間」としてみる」佐伯胖 他 著

福島：一旦「動く歩道」を降りるってことは、「自分を問う」ってことだね。自分自身や今までの当たり前を一回問うってこと。問いを投げかける。あの景色ってどんなだったっけ？って。それが私たちにとっては研究所で学ぶことだったのかもしれないね。

小川：僕は研究所に来るまで、この「動く歩道」の「乗りこなし方」を教わるんだと思っていたんです。うまく、巧みに乗りこなす技、スキルを身につけるために来たのだと。だから、基本的にこの「歩道」自体は変わらない。「乗りこなし方」だけの話だと思っていた。でも、研究所に来てみたら、そもそもこの「歩

道」が本当に正しいのかってことで「乗りこなし方」とかはどうでもよくって…。

小野：わかりやすい（笑）

小川：4月に来た時には、うまく乗れるようになろう。だって今までに「動く歩道」の上で何度も転んでいるから。僕には何が足りなかったんだろうって。でも、そもそも「歩道」そのものが違うんじゃないかって…やっぱり根底だと思う。「乗りこなし方」っていう「方法」じゃない世界。

伊藤：それは降りなきゃ分からなかった。

小川：そう。なぜなら降りなければずっと乗っているから「乗りこなし方」を考えちゃう。

福島：4月に小川さんは「自分をリニューアルしたい」って言っていたけど、それは「乗りこなし方」を教えてもらうんだって考えていたんだね。

小川：そう。転んでもいいようにヘルメットを被るとか、自分に足りないパーツを見つけるとか。生徒を指導するコツや能力を身につけるんだと思っていた。

黒岩：私はそもそも「動く歩道」に乗っていても、気になる花が咲いていたら、自分から降りて見に行っちゃうタイプだから、大体みんなが乗っている「歩道」から遅れちゃうんですね。でも、時には降りるってことも大事なんじゃないですか？

小川：これまでは子どもたちを何とか「歩道」に乗せて、寄り道しないことばかり意識してた。今はこの「歩道」から降りて一回立ち止まってみて、子どもと一緒に花を見にいてもいいかなって思う。これまではその「乗っている動く歩道」を疑うことすらなかったから。

小野：自分はこれまで「学校で乗るべきとされる歩道」になんとか違和感をおぼえて、別の「歩道」を見つけたんです。それが生活科・総合だったんです。周りにいた多くの実践家の先生方は、時に苦しみながらも、しっかりと地に足をつけて、子どもたちと一緒に自分の道を自分の足で歩いている先生方ばかりでした。でも、初めての実践に不安を抱いていた自分は、ここでも数々の素晴らしい実践をなぞろうとしてしまいました。でも、それって全然違って、なぞった実践をしている自分は、自分の頭で考えていないし、まさに「動く歩道」に乗って、自分の足で歩いていないんだということに気が付きました。



小野研究員推薦：
「ふるさとの大地」
信濃教育会

福島：「動く歩道」に乗っている人と、そのすぐ横を自分の足で歩く人って、一見自分と同じ景色を見ているように見えるけど、自分の足で歩いている人たちは、自分の意思で一旦止まることができるよね。「動く歩道」に乗ってしまうと流れに身を任せて進むだけ。見

ている景色が同じに感じるから、同じことを考え同じようにやれていると思っているけど、実は自分は流れに乗ってただけで、本当の意味で自分の頭で考えてはいなかった。見えている景色も実は違った。自分で歩いている人たちは、何かあった時に自分で立ち止まり、自分を見返し、自分で考え発見し、次の歩み方を考えることができる。私たちは研究所に来て、そのための機会をいただいた気がするね。



福島研究員推薦：
「わかる」ということの意味
佐伯胖 著

研究所での学び ～「仲間」って～

伊藤：私はこれまでの経験や感覚でやってきたことが多くて、自分のやってきたこと

を言語化するのが苦手なんです。自分の実践を振り返ってまとめる時に、これってどういうこと？って毎回迷う。今年はとにかく辞書を引くことが増えたけど、研究所に来て本当の意味で自分のものにしていくためには、言葉にしていくってことが必要なんだなって気づきました。言語化されると自分の中に入ってきて自分のものになっていくんだなって。書いてきたレポートを後になって読み返してみると、そうだ、自分ってこうだったよなって改めて自分を振り返れて、自分の血となり肉となるような感じです。研究所に来てよかったなって思います。

小川：文字だけでなく、こうやって喋っているのも言語化じゃないですか。研究所の仲間からレポートに対して、ここはどうなの？それはこうなんじゃない？とか言ってもらって、聴いて、振り返って、変わっていくっていうのも大きいんじゃないかな。

黒岩：やっぱり、一人じゃできないですよ。一人じゃなくて、これだけの人数がいて、それぞれにこれまでの歩みがあって。それで研究所っていう交差点に差し掛かったときに、見返すチャンスがあったから学びを実感できていますけど、これ一人だったらどうですか？もし「動く歩道」を降りられたとしても、結局一人でずっと歩いてきた世界しかないから、それだけじゃ「歩道」を降りたことのよさには気付けないと思うんです。「一人じゃない」っていうのが研究所での学びのよさだと思います。所長、特任所員、部長からも多くを学べる。いろんな先生たちの授業を参観する機会も希望次第でいただける。同僚の先生に迷惑をかける心配もないんですよね。

福島：確かにそう。一人で止まって降りてみたところで、景色を見返してみても、結局その景色を自分だけの価値観で見ているわけだから。学校って、先生と子

どもが密接な関係になるじゃない？それにある意味教室って閉じられた空間だから、そうなる結果的に教師の価値観が強く出ちゃうんだよね。だから自分の成長には今までと違う価値観が入ってくるってことが圧倒的に必要だと自分は思っている。そうなった時に、これだけ違う価値観に毎日触れられて、しかも時間的にもゆとりをもって学べるって、研究所ならではかもしれないね。

赤羽：研究所ならではのといえば、やっぱり「仲間」だと思ってます。「仲間」って言っても、今までの僕の「仲間観」と違うなって思ったんです。出会ったばかりの頃は、お互いのレポートを読み合うときも、自分の尺度で同感的な感じで読んでいた。

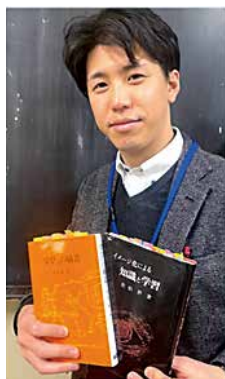
一同：そうそう。「わかる、わかる」ってね。(笑)

赤羽：それって悪いことじゃないんだけど、段々と自分の分身がいっぱいいる感覚になってきたんです。自分の分身が他に五人いて、自分のレポートを読んでいる感覚です。相手の感覚や考え方に想いを寄せて、お互いのことを考えられる仲間になってきていて。それは佐伯所長がおっしゃっていた「その人になってみる」ということが研究員の中で起きてきたんじゃないかなと思ったんです。自分の尺度を一旦捨ててね。だから、指摘された時にも、嫌な気持ちが一切なくて、「よくぞ言ってくれました！」ってありがたい気持ちが何度もしたんですよ。

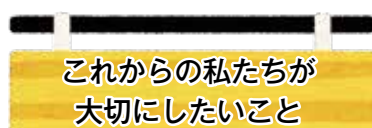
小野：赤羽さん、何度も「そうなんすよ。そこ悩んでたんです！ありがとうございます」って言ってたもんね。(笑)

赤羽：「仲間」としてこんな感覚にもなれるんだなっていうのも、研究所に来て学べたことで、とても大きかったなって思います。

福島：それぞれ学校現場に戻ってもそういう「仲間」になっていけたらいいよね。



赤羽研究員推薦：
「『学び』の構造」「イメージ化による知識と学習」佐伯胖 著



で今まで自分は、こういう「対話」をしてこなかったんだろうって思うけど、現場に戻ったらまず自分から大切にしたいなって思うんだよね。

赤羽：先日の苦野一徳先生のアフタヌーンセミナーで「先生たちが対話の機会を大事にしている学校は、間

違いなくいい学校だ」っておっしゃっていて。そういう場をつくることも大事なんだけど、自分がそこにいると自然とそういう場ができる雰囲気みたいなものをつくりたいと思います。

小川：自分の分身ができるような感覚になれるって、時間がすごく影響していると思うんです。それがたださえ忙しい現場でそういう関係になっていくって難しいと思うんですよね。でも、実習先で出会った先生が、僕が授業や教材研究を楽しそうに自分なりに熱をもってやっていたら、自然と「自分もやってみたいですよ」っておっしゃってくれたんです。何か相手を変えようとしたわけじゃなかったんですけど。それはすごく嬉しかったです。

赤羽：僕は、先生たちって子どもの姿を通して繋がる関係なのかなって思うんです。だから僕は、子どもたちにまず向かって行って、素敵な姿、芽をできるだけたくさん見つけて、それを同僚の先生と分かち合っていくことが、自分たちに一番できることなんじゃないかなと思います。

黒岩：そこだけは絶対に先生たちって、揃っていますもんね。「子どもの素敵な姿」を見たいっていうのは、絶対先生たち全員にあることだから。

福島：その中で、先生たち自身もお互いをもっと知り合っていくってこともすごく大事なんだろうな。私たちは子どものことをもっと知りたいのと同じように、先生たちもお互いのことを知っていくことで、一緒に子どもたちの成長を願う「仲間」になっていけるんじゃないかな。私たちが4月に、研究所に来るまでの歩みを語り合ったことで、お互いに寄り添う土台ができたと思うんだよね。分身になれる土台。

伊藤：私はお互いが自分の弱みを見せられるっていうことも大事だと思って。同僚の中でダメな自分、弱い自分をさらけ出せるって大事だと思うんです。私が実習で出会った相談室の子たちに対して、教師としての自分や「こうあらねば」とか「こうすべき」を取っ払って、「伊藤菓子」として自然にかかわることで相手が安心してかかわってきけることに気づいたんです。先生たちともそういう「仲間」でありたいなって思いました。



伊藤研究員推薦：
雑誌「信濃教育」信濃教育会

黒岩：研究所に来て、自分たちが感じた「よかったな」という感覚を学校でも感じていけるように、自分に何ができるかを考えていきたいですよ。

福島：でも、あんまり張り切りすぎず、自然体でね(笑)。対話ってやっぱりいいね。座談会、ためになったね～。

入会のおすすめ

「信濃教育会賛助会員会」

～退職後も信教とともに学び続けましょう～

長年教職にあり、本県教育文化の向上発展にご尽力くださいましたことに対し、心から敬意を表します。信濃教育会賛助会員会は、長野県教職員として勤務し、退職した方全員が、職種・職階の別なく入会でき、手を取り合って研修に努め、賛助・親睦・助け合いを願って活動している団体です。令和4年度退職または退職予定の先生方には、その意義をご理解いただき、入会くださいますよう心からお願い申し上げます。（なお、退職後、再任用や市町村教育委員会等教育関係機関へ勤務される方は信濃教育会への再入会をお勧めします。）

信濃教育会賛助会員会とは

【会の目的・内容】

信濃教育会・郡市教育会事業への賛助、会員相互の研修親睦、長野県教育の振興発展に寄与

1 長野県教育に関する諸問題の解明と世論の喚起

- ①教育問題検討会（代議員・本部役員で構成）
- ②信教との懇談会
- ③信州“教育の日”（構成団体として参加）

2 地域における生涯学習の環境整備と推進

- ①郡市教育会の事業を賛助
（夏季大、同好会等への参加等）
- ②郡市賛助会員会活動の充実
（地域研修、実技講習、郡市教育会との懇談、会報発行、学校現場へのボランティア等）

3 公益社団法人信濃教育会の事業への賛助

- ①総集会への参加（開催地会員を中心に）
- ②生涯学習センターの運営と活動への賛助
- ③雑誌『信濃教育』『学事関係職員録』の購読、購入促進

4 会員相互の研修・厚生・連絡

- ①総会（講演会・郡市活動報告・会員作品展）
- ②会員名簿発行
- ③会報（年3回発行）
- ④県内研修視察旅行
- ⑤女性会員の集い
- ⑥弔意（弔辞奉呈・会報に弔意掲載）

【会員の資格】

信濃教育会会員だった人、ならびに会の目的に賛同する人

申込みについて

1 入会の申込み

「信濃教育会賛助会員会入会申し込み」はがきを4月1日（土）までに、入会したい郡市の賛助会員会代議員宛てにお出ください。

入会されない場合も必ずお出ください。申し込みはがきおよび郡市賛助会員会代議員名簿等は、後日各人宛てにお届けします。

※なお、信濃教育会事業への賛助ということから雑誌『信濃教育』の購読および『学事関係職員録』の購入募集もあわせていたします。

2 会費

年額 3,000円

3 会費納入方法

後日、本会会報送付の際、振替用紙を同封しますので、郵便局から振り込んでください。

4 会員の特典

- ・本会会報（年3回発行）・会員名簿の送付
- ・県内研修視察旅行への参加
- ・信濃教育会報（総会報告掲載紙）・信濃教育会事業案内の送付
- ・信濃教育会主催の講演会・講座への参加（無料）

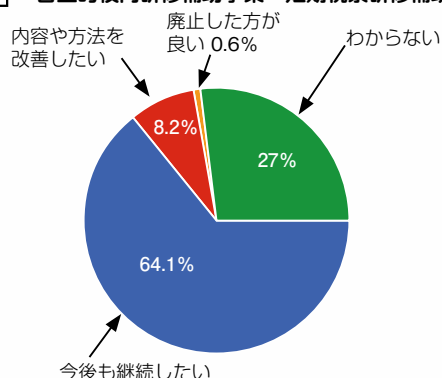


研修視察旅行（更埴）

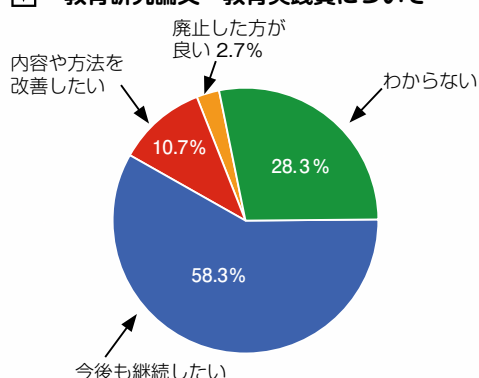
信濃教育会の事業についての会員アンケート報告

各郡市教育会より推薦された124校（小69校，中41校，特10校，高4校）の会員1787名の皆さんに実施し，1286人（回答率72.0%）から回答をいただきました。今年度も昨年度同様，回答や集計の負担を減らすために，インターネット上で行いました。ご協力をいただきありがとうございました。その結果の一部をお知らせします。

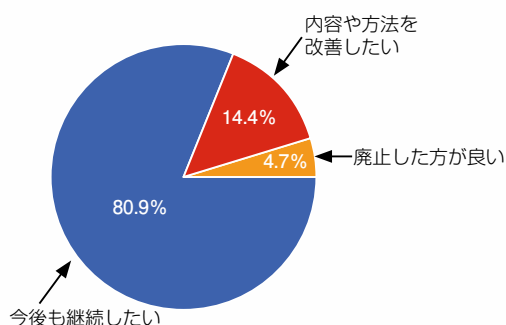
自主的校内研修補助事業・短期視察研修補助事業について



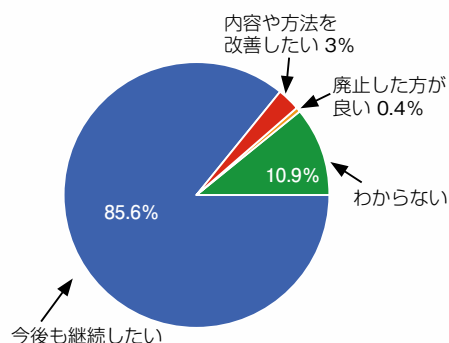
教育研究論文・教育実践賞について



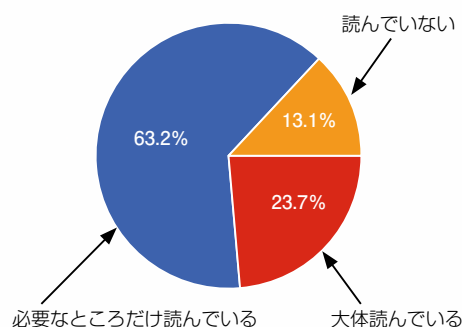
今を生きる子どもの絵展について



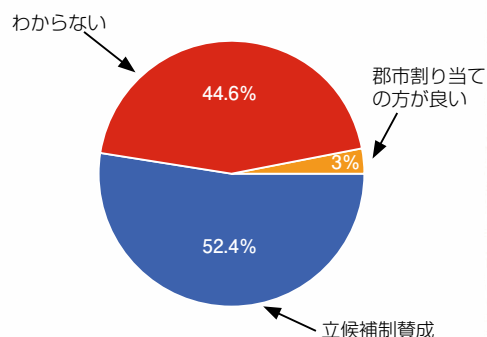
災害見舞金事業について



信濃教育会報について



全県研究大会の立候補制について



○研究調査事業について，今後必要だと思われる研究調査活動についてのご意見（抜粋）

- ・不登校支援や特別支援教育の需要が高まる中で，学校・家庭や他機関等と連携しサポート体制を構築していくコーディネート力を育成していく必要があると思います。
- ・児童生徒理解にかかわる研究が必要ではないでしょうか。児童生徒の実態把握の方法や種類，目的，用途に合わせたニーズはあると思います。

○講習講座について、開催して欲しい講習・講座についてのご意見（抜粋）

- ・20～30代の若手職員のスキルアップにかかわる内容があるとよいと思います。
- ・ICTやiPadの利用にかかわる内容等、現場の抱える課題を共有する場の設定をお願いしたい。

○自主的校内研修補助事業・短期視察研修補助事業についてのご意見（抜粋）

- ・取り組める研修の幅が広く、また研修後の報告についても負担が少ないため、とてもありがたいです。事業の継続をお願いします。
- ・できるだけ多くの教員がこの制度を活用して、県外の取組を観て、自分の実践に生かしていくのがよいと思います。特に若い人がこれを活用して、県外の視察に行けるとよいと思います。

○教育研究論文・教育実践賞についてのご意見（抜粋）

- ・優れた実践に触れることができ、現場の先生方の励みにもなる。継続を希望します。
- ・教職員の資質向上のために重要な活動だと思います。

○全県研究大会の運営・研究の進め方についてのご意見（抜粋）

- ・自主的な立候補補制となり素晴らしい、縛りがなくなってよい。（多数）
- ・学校の課題や教師の課題意識から出発する自発的研究に期待しています。

○信濃教育会の運営等についてのご意見（抜粋）

- ・信州教育の伝統を踏まえ、哲学や教師としてのあり様についておれずに活動を続けてほしいです。本県の中で信濃教育会の取組は非常に重要な位置にあると感じています。
- ・今後も長野県教職員の教師力、指導力向上のための企画をよろしく願いいたします。
- ・会報については、この先を見据え、デジタルでの情報発信や情報共有が気軽にできる媒体になるとよいと感じます。紙ベースでの配布を見直していく道も探してほしいと思います。



わたし自慢 ④2

世界は未知に満ちている

丸子北小学校 竹内 大



私は、長期休業中日本にいないことが多い。世界中をバックパック1つで旅をしている。今まで訪れた国は30か国あまり。ロシア、中国、インド、エジプト、イスラエル、イラン、ミャンマー、○○スタンなどの国々だ。最近ではもっぱらアジアが中心だ。

バックパック1つで低予算の個人旅行のことをバックパッカーと呼ぶらしいが、私がバックパッカーに目覚めたのは、大学時のアメリカ横断である。2か月ほどかけて、サンフランシスコからニューヨークまでバスを乗り継いだ。当時はスマホもなく、「地球の歩き方」を片手にユースホステルを探し泊まった。そ



こで、同じ旅人や現地の人と意気投合し、一緒に旅をすることも何度かあった。

ここ最近ではコロナにより海外へ行けなかったが、年末、3年ぶりに海外へ。目的地はラオス。まず、ベトナムに入国し、バスでラオスへ。予定では26時間。だが、劣悪な道路事情により前でタンクローリーが横転し、通行止め。復旧の目途が立たず、引き返すこともできず、一緒にのバスに乗っていた5人の外国人とともに、バスを乗り捨て、峠をこえることに。当初の倍以上の丸3日かかった。だが、お互いの国について話し、楽しいひと時でもあった。（私の英語はつたないものだったが…）ツアーや飛行機の旅では決して味わうことのできない経験であった。

さあ、次はどこへ行こうか…

予告



安全・安心な学校づくり

この題材では、「まぼろしの花」とその世界について、表したいイメージをもちながら想像を広げ、色や形を工夫して表すことを目標にしました。アイデア用紙には花の特徴やその花が咲く世界、自分の願いや想いをかき加えながら想像を広げていきました。前単元の「絵の具でゆめもよう」では、スパッタリング、ドリッピング、吹き流し、スタンピングといった、色々な絵画技法も体験しましたが、完成した作

品にはそれらの技法が効果的に生かされていると感じました。制作の過程で、どんどん雰囲気が変わっていき、最後の真つ赤なスパッタリングで、有咲さんの作品の雰囲気はガラッと変わりました。色々試すものの、時には納得いかない表情で首をひねり、塗り重ねてきた制作過程。「先生できました！」満足げに持ってきたときのあの笑顔が忘れられません。

指導者
茅野 弘幸（田口小学校）

100年館の絵

令和3年度 永年保存作品
今を生きる子どもの絵



「まぼろしの花」花福楽（かふくらく）
渡邊有咲（田口小4年）

信濃教育博物館所蔵

会 員 ひ ろ ば

私の中の私

職場体験学習を終え、将来について考える2学年の生徒の心の動きをイメージしながら教材研究を進める中で、自己（自分から見た自分）の表情を作る題材、「私の中の私」が生まれました。生徒自身が最初に注目したのはマスク着用でも見える目の部分でした。そこで表現主題を生徒が明確にしていくため、まずは卓球ボールを半分に切断したものを「玉眼」とし、憧れの自分への思いを瞳孔の大きさ、形、色に着目しながら玉眼に表現しました。

Aさんは玉眼に暖色で輝きを描くことで、ワクワクして輝く姿を表現しました。明確になった主題をもとに、更に粘土で顔のパーツのボリュームに強弱をつけることで、好きなことへの熱量を伝える工夫をしました。

題材作りを通して、生徒の思いをいかに教師が引き出すかが大切だと感じました。思いが表現に結び付いたそのとき、生徒達の自己実現が成立します。

（清水中学校 押澤利満）



清水中 Aさん「輝く私」

教職員川柳

令和4年度の応募は締め切りしました。次号にて優秀作品を発表します。たくさんのご応募ありがとうございました。

見えてるよ 開くよ 開くよ 開くよ Youtube (四蔵法師)
初春も 頭に浮かぶ 我が生徒 (四蔵法師)
部活なき 週末迎え 「何しよう…」 (熱血！嘆息！部活顧問)
初仕事 ボール運んで 空気入れ (熱血！嘆息！部活顧問)

投稿はメールでお願いいたします。kaihou@shinkyo.or.jp

「信濃教育会報」カラー版は信濃教育会ホームページの「会員のページ」でご覧いただけます。

